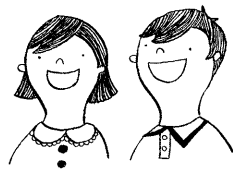


響き合う音 響き合うからだ

猶原 和子



音が意味をもつとき、うたいだす

小学二年生の音楽の時間のことです。歌集の中からうたいたい曲を四人がリクエストし、みんなであうたっていました。『歌はぼくらの友だち』（石井亨・作詞／作曲）のリクエストに「やったあ！」の聲が上ります。ふと見ると、丸い輪の中から少し離れて弘志君が手遊びをしていました。気がついた傍らの子が「ねえ、ちゃんとして」「口をあけて」と、弘志君にきつい言葉を投げ掛けています。確かに一見すると、彼は興味がなさそうにみんなに背を向けるようにし

ています。私は気になって、ずっと弘志君を見ていました。するとおもしろいことに気がついたのです。

彼は前述の曲のときは、つまらなさそうな顔をしてみんなに背を向けて口も開きません。しかし、『未知』という名の船に乗り『阿久悠・作詞／小林亜星・作曲』の前奏が始まると、ふっと表情がゆるみ、からだが音楽に合わせて揺れ始めたのです。仲間の声に合わせて口も開き、やがて歌集をめくって曲を見つけ、歌詞をたどり始めました。覚えているところになると、顔を上げ、仲間の方に向つていい表情でうたっています。同じように『トレロカモミロ』（F. マレスカ・

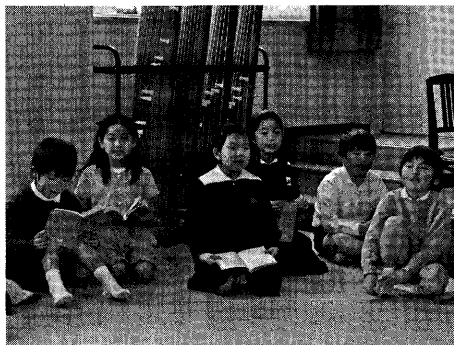
作詞／坂田寛夫・訳詞／M.バガーノ・作曲)のときも、歌の途中からみんなの輪に近づいて入り、楽しそうにうたいました。このことは何を意味するでしょうか。

弘志君にとって、たとえ周りの子がうたつていても、興味のない曲は周囲から聞こえる生活音と同じように、彼にはまだ「意味をもたない音」にすぎないのです。それに対し、『トレロカモミロ』は楽しい世界を仲間と共有できる、そんな予感のする心地よい音楽であることを彼のからだが生かしています。

ある子にとって楽しい音楽でも、ある子にとってはつまらない音の場合もあることを、私たち教師はきちんと踏まえることが大切だと思います。どんなに教師が「この曲は世界中で有名なモーツァルトがつくったすばらしい曲です」と言っても、その曲を好むか好まないかは、その子の生活やその地域の文化などを背景に、一人ひとり異なるのです。その子の情動を揺り動かし、必然性をもったときに、音は

音楽となります。

ともすると、一緒にうたう・演奏するといったふうに、音楽は「同質性」を求める道具に使われがちです。しかし、個々の子どもへの音に対する興味の異なりを尊重することが大事で、このことがひいては、「異質性を排除しない」公共性のある表現者を育てることにつながると思っています。



▲友達の選んだ曲を一緒にうたう

耳を澄ます

私は低学年で、トーンチャイムを用いた「聴く」活動をよく行います。トーンチャイムは音楽療法などでもおなじみの楽器です。

授業の中で、ひと息ついたとき、まず私がチャイムを一本取り出します。「音が聞こえなくなってきたと思ったら、手を挙げてね」。最初は、聞こえたと思った瞬間に手を挙げ、周りを見て慌てて引っ込める子や、まだ聞こえそうだとずっと見つめる子などさまざまです。慣れてくるとすっと落ち着き、静かな空間にチャイムが柔らかく響きます。目を閉じて聴くと、また世界が一変します。

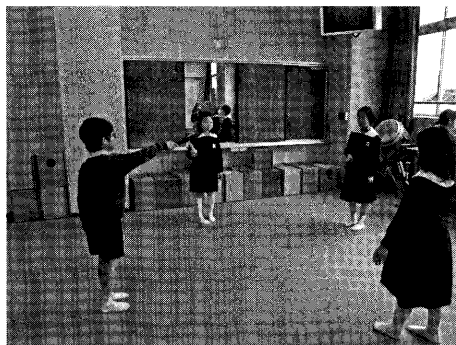
音の動きを視覚的に意識させることもあります。トーンチャイムを鳴らしながら動かすと、空気の振動方向が変わります。「あ、見えたよ、音が動いているのが見えた」と驚いたように子どもたちは言い

ます。一緒になって手を動かす子もいます。理屈ではなく、空気が音を伝えていくことをからだで感じているのです。

何人が交代で鳴らしてみます。トーンチャイムの大きさや鳴らし方で、音の響き方が異なることも実感します。「静かにしなさい」ではなく、「耳を澄ましたくなる」活動を取り入れていくことは、生活音や社会音が氾濫している今だからこそ、必要なのではないのでしょうか。

他者とともに音を生みだすからだ

今度は、教室の四隅に子どもが一人ずつチャイムを持って立ちます。ある子からほかの三人の誰かへ音を届けます。もらった子はその子からの音が消えたと思ったら、次の子へ向けてチャイムを鳴らしませう。四人とも鳴らしたら、最後の子の音が消えたときに四人一緒に鳴らそうという約束です。



▲響きをからだで感じ、合わせる

最初の子が音を鳴らしました。次の子は音をよく聴いて次の子に回します。けれども次の子はうれしくてすぐにチャイムを鳴らしてしまいました。さすが周りの子が「まだ聴こえていたよ」。次第にどの子も音に注意深くなります。

いよいよ最後に四人が合わせるところです。ここでは「せーの」など言葉を使わないで合わせようと

いう約束です。お互いの顔を見ながらポンポン。残念！ ずれてしまいました。

わずかな時間でも、毎回繰り返し返していくと、少しずつタイミングが合うようになります。中にはグルーブで「最後の音を聴いて、心で1、2、3と数えて鳴らそうよ」「最後の人の目をよく見ていたら合うんじゃない？」などと工夫する姿も見えてきます。外に向かって音を発信するときには、その音（表現）がからだの構えと深く結びついていることを、子どもたちは他者とともに体験から学んでいます。

聴き合うからだ

「聴く」という行為は、発信者にとっても大切だということがおわかりいただけたと思います。また、受信者にとっても「聴く」ことは受動的でなく能動的な行為にしていくことが大切です。

ある日いつものように一人の鳴らしたチャイムの響

きをみんなでじっと聴いていると、突然亮君が隅に走り、チャイムを持つ子の前にびったり座りました。「どうしたの？」と尋ねると「この音をすぐそばで聴きたかったの」と答えました。両耳に手を当て、からだをチャイムに向けています。私も並んで聴いてみました。すると、からだはチャイムの音色に包まれて、違う世界に入り込んだ気持ちになりました。「ああ、これを亮君は感じたかったのだな」と思いました。何人かも同じようにしています。ほかの子も熱心に耳を傾けています。亮君の一言が、子どもたちに「聴く」からだを促したのです。

いい緊張感が教室に漂っています。いよいよ四人が合わせて鳴らす順番がきました。チャイムを持つ子だけでなく、周りの子も息を詰めて待っています。ほぼ同時にチャイムが響きました。その瞬間、目を閉じていた子どもたちが一斉に顔を上げ、自然と拍手がおきました。

ミュージッキングという考え方

クリストファー・スモール（アメリカの音楽教育学者）は、自ら音楽を生みだしたり、他人の音楽に耳を傾ける、あるいは、その活動を手助けする、踊る、語るといった、音とかかわるすべての活動を、「ミュージッキング」という動詞で表しました。これは、楽器の演奏や鳴り響く音だけを音楽とするのではなく、心を癒したり思いを訴えたり、互いに分かち合うといった社会（他者）とつながる行動としてとらえた言葉です。この考えで幼児を見つめると、たくさんのミュージッキングを発見することができ
ます。

音楽は単独に存在するのではなく、社会の文脈に位置付けており、その時代やかかわる人々との関係の中で常に変化し続けているものだととらえると、子どもの表現行動・からだの動きをていねいに観察す

ることが、音楽的に意味をもつということがおわかりいただけるのではないのでしょうか。

脳科学の立場からの示唆

脳科学者の小泉英明氏によると、生まれて五日以内の新生児の脳をイタリアで調べたところ、母国語のイタリア語を聞くと聴覚野の周辺が強く反応するのに対し、テープを逆回しにすると、ただの音としての反応しか示さないという結果が得られたそうです。新生児の段階から、人は自分にとって意味ある音を選んで学んでいるのですね。

また小泉氏は脳の中の新しい皮質は知識を蓄えたりするが、情動は古い皮質にかかわることが多いので、ここを育まなければならぬと述べています。音楽を感じるような部分は意識の下、つまり実験を積み重ねることによって鍛えられるのだそうです*。幼いときから知識を詰め込もうとしている現

在の社会に対する大きな警告です。

弘志君が一緒にうたいたいくなくて仲間を寄せた音の世界。このような体験が人を豊かにしていくことを脳科学の研究は教えてくれています。それぞれの興味・関心に基づいた表現行動を受けとめ、より豊かな体験となるような授業内容や方法を工夫すること、その一方で「この音楽は嫌いだ」という感情も認め、「嫌いな音楽を強制しない」ことも心掛けたいと思っています。

音楽は人を優しく包み込むこともできますが、一つ間違えると政治的にもおそろしい兵器になります。一人ひとりの子どもが他者とともにより豊かな表現者になっていくような授業をこれからも考えていきたいと思っています。(お茶の水女子大学附属小学校)

* 小泉英明「教育における脳科学の可能性」『児童教育』

⑱、お茶の水女子大学附属小学校、二〇〇八年